



早稲田大学大学院
教育学研究科 教授

三村隆男

中学校における 職業レディネス・テストの 効果的な活用

職業レディネス・テスト（以下V R T）の活用が増えつつあるとのことを伺い嬉しく思う。高校教員時代にV R T新版を利用していただき30年以上になる。現場での実践を通し、V R Tの有用性を常々認識しており、幸運にも、2003年にアイオワ大学の指導教授のジェプセン（D.A. Jepsen）博士とAmerican College Testing（A C T）を訪問する機会を得た。R I A S E C理論の研究はもちろん、World-of-Work Mapの開発担当のスワニー（K. Swaney）博士から話が聞けたことでV R Tへの理解も大変深まった。V R TのB検査の背景にはWork Task Dimensionsがあることもその時知った。

その後、V R Tに「結果の見方・生かし方」が付き、飛躍的に教育現場での活用度が高まったと言える。職業レディネスという概念を、社会的・職業的自立にむかう過程で育まれる「役割興味」とすることで、V R Tの中学校における活用度も高まると考える。

現行の学習指導要領では小中高12年間を通して「一人一人のキャリア形成と自己実現」が求められた。さらに、小中高の学習指導要領解説特別活動編では、キャリア形成を「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくための働きかけ、その連なりや積み重ねを意味する」（傍線筆者）としている。キャリア形成上

「役割興味」を知ることとは自分らしい生き方を実現していく上では不可欠なのである。「役割興味」を職業レディネスにつながる文脈も重要であるが、日常生活の中で自らの「役割興味」を醸成することも重要である。

こうした考え方を前提に中学校におけるV R Tの活用について考えてみたい。

中学校では職業理解の重要な機会である職場体験がコロナ禍で大きく縮小された。従来から体験活動充実のためV R Tを導入している学校もあったが、職場体験の日数減を補うために活用する学校も出てきている。

V R Tには、検査結果を基に関心のある職業を選ぶ作業W O R K 3がある。ここでは多くの職業から関心のある職業をさがすが、その際未知の職業の多さに生徒は気づく。こうした気づきは、職場理解の脆弱さへの自己理解につながり、職業学習への動機づけとなり、職場体験等の取り組みの効果を高めるのである。

一方、留意しておく点もある。スーパリーの職業適合性では、興味はパーソナリティに類型化され、能力に類型化される適性とは厳密に区別している。これは、V R Tが適性検査と誤解されることによっておこる弊害を予見している。W O R K 3の各タイプに示された職業は、示されたタイプの人たちが